AQUA CULTURE NETWORK

ACN REPORT

第8号/1996年8月31日発行
発行人　田嶋　猛（ACN代表）
編　集　アクアカルチャーネットワーク事務局
〒838-01　福岡県小郡市小郡1139-1㈱田中三次郎商店内
TEL 0942(73)1111　FAX 0982(72)1911

CONTENTS

Ⅰ/第1回ACN各社と水産種苗生産者との懇話会　ACN　事務局 ―― 1-2
Ⅱ/速報　平成8年度種苗生産状況　ACN　総　評 ―― 3-4
Ⅲ/新技術・新製品［水産用酸素ガス発生装置TOXシリーズ］―― 5

Ⅰ/「第1回　ACN各社と水産種苗生産者との懇話会」

―8月5日　ﾛｲﾔﾙﾊﾟｰｸﾎﾃﾙ高松にて開催される。―

■前号でご案内致しておりました種苗生産者の方との懇話会が、去る8月5日高松のﾛｲﾔﾙﾊﾟｰｸﾎﾃﾙ高松・会議室において開催され、四国・瀬戸内地区の種苗生産者を中心に九州からの参加も含め盛会となりました。
皆様ご承知のクロレラ工業㈱主催の「水産種苗フォーラム」が隔年ごとに開催されておりますが、今年はその間の年となっております。そこでACNでは毎年情報交換を行う場として「ACN各社と水産種苗生産者との懇話会」を企画し、山形屋水産㈱山形収司専務と㈱八光　堀内健司専務に幹事として仲介いただき開催の運びとなりました。
　開会にあたりACN会長　田嶋より「ACNの日頃の活動は九州が中心ですが、今回四国、瀬戸内地区の生産者の方々と情報交換する機会を得ました。今後もこのような懇話会を情報交換の貴重な場として開催していきたい。」と挨拶、引き続き今回の幹事である山形屋水産㈱山形収司専務が「業界は厳しい状況にあるが、互いに知恵を出し合って生き残りをかけたい。今後も懇話会を毎年実施したい。」との決意を述べられました。

■続いて各種苗生産者が自己紹介と自分が抱えている問題点を話され、ACN各社より自社の紹介をしました。
さらに、ACN側からクロレラ工業㈱重野より本年度の各魚種種苗生産状況についての説明（詳細は別項速報参照）と、㈱サンダイコー山村より本年の魚病の発生状況と天然種苗（ハマチ，カンパチ）の導入状況及びトラフグ養殖におけるホルマリン規制について説明しました。　（以下時頁）

■今回の懇話会のメインとなったフリーディスカッションでは、業界の動向から種苗生産の技術的課題に至る幅広い内容で、活発に意見交換が行われました。
特に、「マダイの種苗性、ヒラメの白化、トラフグの人工採卵と奇形」の問題など種苗生産技術に関わる課題について活発な議論が交わされました。
　懇話会の最後に上野製薬㈱研究部の柏木より「魚病とその対策」として講演を行い、細菌疾病からウィルス疾病まで基本的な魚病についてＯＨＰで説明し、また専門家の立場から現在社会問題になっている病原性大腸菌O-157についても述べました。
■時間の都合でフリーディスカッション、質疑応答等が幾分未消化でありましたが、その後の懇親会の席でも活発な意見交換が終始行われ、アトラクション等もあって大盛会の内に閉会しました。
　翌日（８月６日）は、日本栽培漁業協会屋島事業場と屋島水族館の視察を行いました。視察に参加された方々は、特にＬ型ワムシの培養法やトラフグの種苗生産状況から濾過機、ＵＶ殺菌装置など設備関係まで熱心に見学されていました。
日栽協及び屋島水族館の皆様のご厚意に御礼申し上げます。

最後に、本年度より開催の運びとなりました「ＡＣＮ各社と水産種苗生産者との懇話会」は、山形屋水産㈱山形専務、㈱八光堀内専務のご尽力また参加頂いた方々の熱心な取り組みで盛会の内に終了致しましたことを、ＡＣＮメンバー一同厚く御礼申し上げます。
今後も、こうした生産者の皆様との情報交換、研究の機会を重ねてまいります。
ありがとうございました。

講演会/日本水産学会秋季大会関連行事

平成８年度第一回水産増殖懇話会講演会　「ハタ科魚類の生態と増殖」
■日　時　　平成８年１０月８日（火）　10：00～17：00
■場　所　　日本水産学会秋季大会第２会場（九州大学法文系キャンパス）
■講演/ﾊﾟﾈﾗｰ　廣瀬一美（日大生物資源）中園明信（九大農）上野信平（東海大海洋）関谷幸生（日栽協玉野）氏など

水産環境保全委員会講演会「環境保全のための養殖場のクローズ化」
■日　時　　平成８年１０月８日（火）　17：00～19：30
■場　所　　日本水産学会秋季大会会場
■講　演　　丸山俊朗（宮崎大農）菊池弘太郎（電中研）古川賢男（長野水試）の各氏

Ⅱ/平成８年度種苗生産状況-速報（平成８年７月３１日現在）

ＡＣＮ総評

シマアジ

■かつて一尾1,000円以上の時もあったが適正需要の２倍に当たる600万尾の生産により種苗価格は大暴落し100円/尾を切るまでになった。
しかしながら生産の不安定さと価格の安さに嫌気がさし生産量の減少に伴い価格は昨年150円から200円/尾、本年200円から300円/尾と上向いてきた。生産量は昨年も本年も250万尾でありマリンパレス蒲江事業場には実際出荷量160万尾に対して300万尾を超える引き合いが殺到した。

■種苗生産場に於ける問題点はＳＪＮＮＶ（シマアジ神経壊死症ウィルス）による全滅に至る病気である。親魚からの垂直感染であるが、キャリア親魚からの受精卵から必ず発病するわけでもなく親魚がキャリアであるか否か（ＰＣＲ法による）の確認とともに親魚管理技術が種苗生産に大きな影響を与えると思われる。

■主要生産業者は、マリンパレス、山崎技研、マルハ、近大、小笠原、長崎県漁業公社である。

マダイ

■ここ２、３年のマダイ種苗生産の特徴を端的に言えば「生産期間は２倍になったが、生産量は２分の１になった」ということである。そしてさらにブランド化が進んだことも特徴である。
かつて種苗生産量は、ワムシの安定的生産方法に支えられて１億５千万尾を突破し成魚価格の下落を招き、種苗生産者協議会を作り何とか節度のある生産量を保持していこうとなされた程であった。ところが、たまたま協議会の発足と時を同じくして様々な要因により思い通りに生産できなくなり図らずも協議会の目的に一致したことは皮肉なことである。

■マダイ種苗生産時期の区切りは生産期間の長期化のために付けにくくなってきているが、平成６年,７年のイリドウィルス症などにより2,000万尾が減耗し、4,500万尾が明け２才魚となった。
本年は昨年にも増して種苗生産は困難をきたし、更に低水温のため沖だし種苗の減耗や出荷後の滑走細菌症に依るクレームの等のため、６月末までの出荷尾数は5,000万から6,000万尾止まりと推定される。但し、７月に入り予約魚は順調に出荷され需要は満たしたものと思われる。
更にそれ以外に1,000尾位の出荷可能尾数はあるがイリドウィルス症恐さのために養殖業者は１０月までは目立った動きはないものと思われる。そのため種苗業者による夏越し作業が必要である。
本年のハマチやカンパチにおけるイリドウィルス症発生の報告は過去２年より大変少なくまたマダイ種苗のサイズ大型化も歩留まりに好影響を及ぼすかもしれない。
本シーズンは昨シーズンにも増してマダイ種苗生産の早期化と長期化が進むものと思われる。

■マダイ種苗生産業者は近大、山崎技研、吉川水産、清宝水産、堅田漁協、ニチモウ、九州種苗があげられる。

トラフグ

■養成親魚からの採卵技術の進歩に伴い、１２月の採卵も可能となり今シーズンはトラフグ超早期種苗が３月に出荷された。
例年は長島町を皮切りとする天然熟卵による３月下旬から４月にかけての生産開始であったが、親魚価格の暴騰（30万円/kg）及び他魚種のホルモン利用技術のトラフグへの応用により２月下旬からの天然魚による採卵が主流になりつつある。
種苗出荷は、５月下旬より始まり、７月中旬で終了する。
今シーズンは生産過剰気味であり、現在も種苗生産業者が沖だし漁場で抱えたものが200万尾あるものと推定され種苗業者による歯切り作業が必要となっている。
トラフグの場合、種苗生産業者夏越し作業は困難で品質の低下が心配である。
７月末までの出荷尾数は約2,000万尾と推定される。価格は、120円から160円/尾。
■主要生産業者は、長崎種苗、大島水産種苗、バイエヒメ、四国興産である。

ヒラメ

■早期物の種苗価格が100円/尾を割り込むようになって、ヒラメからマダイにシフトする種苗業者が増え、今シーズンの出荷種苗は1700万尾と昨年に比べて一段と減少してきた。
種苗生産についてはマダイのような大量生産は不向きな魚種であり単価の割には、手間暇がかかるので、中小規模の生産業者向きであり年間ヒラメのみしか生産しない業者もいる。
■放流用のヒラメ種苗として各自治体が100万尾から300万尾の計画を実施する段階に入っており、夏期の受精卵の生産者ととして公的機関と民間業者の連携が望まれるところである。
今シーズン九州においては春の放流用種苗が不足し他県から手配する必要が生じたが、予め同県内の県や市の機関と民間業者が数量配分をしておけば放流事業がもっとスムーズにいくのではないだろうか。
一時、韓国より種苗が購入されたこともあったが商流として定着するに至らなかった。
成魚については約2,000万t/年輸入されていると言われている。

（了）

好評！ワムシ販売開始

昨年３０社余りの種苗場で好評いただきました、クロレラ工業㈱開発部で生産された［Ｓ型ワムシ］を販売致します。
海岸より離れた内陸で、人工海水で飼育飼しておりますので海水由来の細菌汚染の心配は非常に少なくなっております。

■販売期間　平成８年８月下旬より　■発送日　毎週　火曜日・木曜日
■金　額　１億個体=15,000円　(5,000万個体/ケース)
■運　賃　着払いにてお願い致します。

発売元　太平洋貿易株式会社　担当［漁崎（りょうざき）か浅田］まで　フリーダイヤル 0120-39-3138
092（731）6761　代表

Ⅲ/.新技術.新製品

水産用酸素ガス発生装置　ＴＯＸシリーズ

太平洋貿易㈱はこれまで住友精化㈱及び小島製作所㈱の汎用型酸素発生装置を６０台余りの納入実績があるが、この度小島製作所㈱の協力を得て水産種苗生産場など、塩気を含んだ多湿な環境を考慮した水産用酸素発生装置を開発した。

これまでの納入経験の中で

・Ｎ２吸着用の合成ゼオライト劣化によるＯ２濃度の低下
・塩気による外盤外板部分錆び付き
・塩気による電磁弁シートの劣化、Ｏ２濃度低下及び変動
・劣化ゼオライトのみの交換不能
・室内設置の場合の騒音、発熱

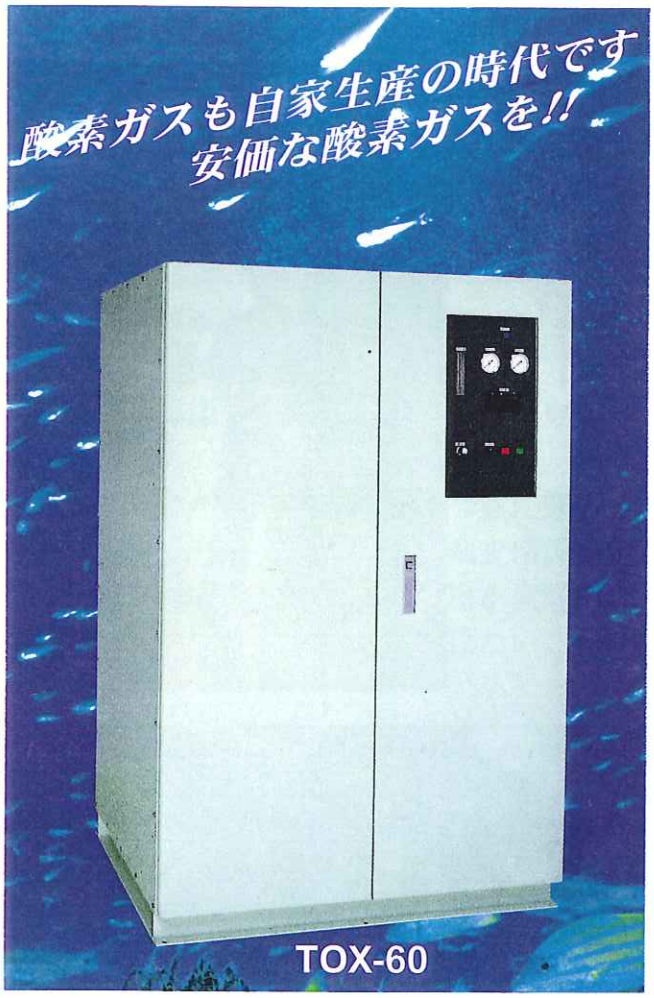
などの問題がありこれらを十分に考慮した新製品ＴＯＸシリーズが発売となった。

■特　徴

①耐塩塗装仕上げ
②水分逆流防止弁内蔵
③小型機種は電磁弁とﾄﾞﾗｲﾌｨﾙﾀｰによるﾄﾞﾚﾝ自動排出機能内蔵
④中型機種は冷凍式脱湿装置付ｽｸﾛｰﾙ圧縮機で静音、省エネ運転しかも電動式自動ﾄﾞﾚﾝ排出機付き
⑤合成ゼオライト交換可能
⑥空気中の塩気を考慮した電磁弁材質
⑦全機種Ｏ２流量計内蔵（Ｏ２濃度計はｵﾌﾟｼｮﾝ）
⑧コンパクト設計.全自動運転
⑨高圧ガス取締法適用除外

■用　途

①種苗生産・陸上養殖の酸素補給
②ワムシ高密度培養時の酸素補給
③ワムシ・アルテミア二次培養時の酸欠防止
④稚魚沖出しホースへの酸素補給
⑤選別・出荷時の酸欠防止
⑥揚水ﾎﾟﾝﾌﾟ故障時の酸欠防止
⑦生物濾過槽の能力アップ
⑧オゾナイザーの原料用



ＴＯＸシリーズ

総発売元　太平洋貿易株式会社

〒810　福岡市中央区大手門３-１-３

ＡＣＮ主催者側

クロレラ工業（株）	太平洋貿易（株）	山形屋水産（株）	（株）八光	上野製薬（株）
重野部長代理	田嶋社長	山形専務	堀内専務	安尾氏

上下：懇親会